

## 「後生の一大事」

炭竈 豊

「お前がいのちをかけてでもしなければならぬことはなんや？」

私は昔から、祖父にこのような問いかけをよくされました。いのちをかけるなんてことは普通ではありません。しかし、祖父はその普通で無いことをしつこく言い続けていました。私は、当時はよくわからず、「ダイエット」、「受験」、「就職」だとか、人生のイベントでなければならぬことを候補にあげていました。それらは、私には、かなりがんばらなければクリア出来ないイベントのように思っていたからです。しかし、一個一個クリアするたびに、それらが「いのちをかけてでもしなければならぬこと」とは思えませんでした。そもそも、いのちをかけるということも、どういうことか分からないのが実際でした。

しかし、いのちをかけるということがおぼろげながら感じ取れた出来事があります。それは祖父の死です。祖父は心臓の持病をおして弓道を教えていました。普段から、「わたしは道場の上で死ぬ覚悟ができています」と語っていました。家族も必死で止めましたが、祖父の決意は固く、歩くのもままならない状態で指導を続けていました。そして、2月上旬の寒い中、行われる弓道の合宿中に倒れ、そのまま亡くなりました。祖父にとって、「いのちをかけてでもしなければならぬこと」があった証拠でした。

祖父が大事にしていた言葉に「後生の一大事」という、蓮如上人の『御文』の中にでてくる言葉があります。それは、自分が今生かされている意味を知り、そのために生きるということ、祖父は、後生の一大事、つまり、「いのちをかけてでもしなければならぬこと」と言われたように思えます。

私は今現在も、「いのちをかけてでもしなければならぬこと」と出遇っていません。しかし、祖父のいのちをかけた姿は目に焼きついており、尊く、気高い姿に見えました。人間は、「いのちをかけてでもしなければならぬこと」に出遇ったとき、祖父のように、光り輝くものなのだと感じました。そして私も、「いのちをかけてでもしなければならぬこと」に出遇うために、真宗に身を置き、祖父の大切にされた「後生の一大事」という言葉を学び続けています。